

Dr. Beth Morling

University of Delaware

**Teaching social psychology after the replication crisis**

What should we be teaching in undergraduate psychology courses—especially after the replication crisis shook up what we knew about our field? I suggest we affirm the original foundation for undergraduate education in psychology: Quantitative, empirical reasoning about human behavior. In the aftermath of the replication crisis, the curriculum can both change and stay the same. Methods courses should modernize to address preregistration over p-hacking, effect sizes over p-values, open science over competition, and skepticism over “proof.” Content courses should teach theories and findings, but mainly as a vehicle for delivering the critical thinking core of psychology: theory testing, evidence-based argument, clear writing, and learning how to learn.

Moderator:

Sayaka Suga (Keio University)

Kai Hiraishi (Keio University)

Chizuru Shikishima (Teikyo University)

Dr. Joshua Correll

University of Colorado

**Reconsidering the effects of cross-race contact on face perception**

In a recent theoretical model (Correll, Hudson, Guillermo, & Earls, 2016), we proposed that cross-race contact alters face processing, influencing both individuation (particularly the cross-race recognition deficit or CRD) and race-based classification. This model particularly predicts effects based on expectations and perceptual expertise (rather than attention and motivation). Our lab's early empirical tests, however, showed disappointing results. We therefore embarked on several projects in an effort to better conceptualize and study this relationship. I will describe both the original theoretical model and our new work. In particular, I will discuss (a) development of a scale to more effectively measure contact, (b) a meta-analysis of the contact-CRD relationship, (c) an effort to use multidimensional scaling to precisely estimate the mental representation of faces, and (d) efforts to uncover the aspects of facial morphology that influence face differentiation. The results of these studies suggest that methodological issues often compromise estimates of the contact-CRD relationship, but that (when measured appropriately) the relationship is real and potentially much more influential than previously thought. The results also provide insight into the psychological processes that give rise to the CRD, suggesting that many models (including our own) are either incorrect or incomplete.

Moderator:

Tomoko Oe (Teikyo University)

Dr. Joshua M. Tybur

VU Amsterdam

**The psychology of infectious disease – before, during, and after COVID-19**

In 2020, SARS-CoV-2, a novel pathogen spread primarily via respiratory droplets and aerosols, brought the world to its knees. While this specific coronavirus was new, the broader threat posed by infectious disease was not. Indeed, every human that has walked the planet has been threatened by pathogens, just as all complex forms of life on earth have been. In response to these threats, humans (again, like all complex organisms) have evolved myriad anti-pathogen defenses. Many of these defenses are behavioral in nature and, consequently, they influence myriad phenomena of interest to social psychologists. This lecture will outline how our anti-pathogen psychology is specialized for detecting infectious microbes (e.g., via olfaction, vision, and taste), for balancing the costs of avoiding infection against the benefits of other adaptive behaviors (e.g., child-rearing, eating), and for deploying emotions (e.g., disgust) and behaviors that neutralize pathogens. It will further describe how our anti-pathogen psychology influences behavior during a respiratory pandemic (such as the COVID-19 pandemic), and how it does not. Finally, the lecture will describe the most fruitful areas for research that can further illuminate how humans avoid infectious disease.

Moderator:

Kai Hiraishi (Keio University)

Chizuru Shikishima (Teikyo University)

Dr. Jamil Zaki

Stanford University

**Unforced errors in our emotional lives**

People commonly regulate their emotions in response to affective goals—for instance, to feel happy, or to experience emotions that are useful at a given moment. But where do affective goals come from? In this talk, I argue that people hold consistent theories about emotion, including their structure, function, and utility. These theories guide emotion regulation, affect, and behavior, but are sometimes miscalibrated, leading people to make "unforced errors" in their emotional lives. I present two lines of work that examine such theories. In the first, we find that people vary in their beliefs about happiness. Some individuals believe it is zero-sum, such that one person's happiness comes at the cost of another's. This belief tracks reductions in prosocial behavior and happiness. In the second, we find that people vary in the extent to which they believe empathy is useful in the political domain. People with negative theories of empathy report less interest in inter-party compromise or social connection. Across both lines of work, we find that changing people's emotion theories can shift their behavior in more adaptive directions, providing hints as to how we can help people avoid unforced emotional errors.

Moderators:

Yu Niiya (Hosei University)

Tomoko Oe (Teikyo University)

社会「転換」心理学 — 社会が変わる, 社会を変える

- 企画者： 日本社会心理学会第62回大会準備委員会
堀田 結孝 (帝京大学), 大江 朋子 (帝京大学)
- 司会者： 堀田 結孝 (帝京大学)
- 話題提供者： 池田 謙一 (同志社大学)
内田 由紀子 (京都大学)
坂田 桐子 (広島大学)
浜井 浩一 (龍谷大学 非会員)
- 指定討論者： 唐沢 穰 (名古屋大学)

概要

AIの発展に代表されるテクノロジーの進歩, SNSを通して世界中の誰ともつながるグローバル化により, もはや10年前の生活が思い出せないほどのスピードで, わたしたちの社会は変化している。更に, COVID-19のパンデミックは, わたしたちの生活を大きく変容させ, 新しい生活様式がスタンダードとして受け入れられつつある。同時に新たな時代の到来は, わたしたちに従来の価値観からの転換を迫る。働き方改革, マイノリティへの配慮, 持続可能な開発目標などに代表されるように, 前時代からの価値観や社会の転換が, 国内においても重要な課題として近年認識されている。

本シンポジウムでは, 政治, 文化, ジェンダー, 司法など多様な視点から, わたしたちの価値観や行動がどう変化してきたか, 価値観が変わることで社会がこの先どう変化していくか, そしてわたしたちは社会をどう変えていくべきかについて議論する。

はじめに, 池田謙一先生・内田由紀子先生のご講演から, 日本人の価値観の変遷について概観していく。池田先生には, 日本人の価値観や民主主義の変化をCOVID-19による影響と交えてご講演いただく。内田先生には, 文化的価値観や幸福感の比較文化研究についてご講演いただく。続いて, 坂田桐子先生・浜井浩一先生のご講演から, 社会の変化の予測について概観していく。坂田先生にはジェンダーに関する課題とダイバーシティ社会についてご講演いただく。浜井先生には統計データをもとに犯罪事件の変化についてご講演いただく。最後に, 指定討論者の唐沢穰先生には, 今後の社会転換に向けて社会心理学が取り組むべき課題を挙げながら, 本シンポジウムの総括をしていただく。

本シンポジウムがコロナ禍の時代, そしてポスト・コロナへの時代のうねりを渡り抜く上での道標となることを期待したい。

スマートシティにおける社会受容と ELSI

企画者： 唐沢 かおり (東京大学)

司会者： 唐沢 かおり (東京大学)

話題提供者： 田井 光春 (日立製作所・日立東大ラボ 非会員)

橋本 剛明 (東洋大学)

清水 佑輔 (東京大学)

尾崎 信 (東京大学 非会員)

指定討論者： 藤井 聡 (京都大学)

概要

近年、社会生活を支えるコミュニティのあり方について、スマートシティというコンセプト下での議論や設計、技術の実装がすすめられている。スマートシティは、「都市が抱える諸問題に対して、ICT等の新技術を活用しつつマネジメントが行われ、全体最適化が図られる持続可能な都市または地区」(国土交通省)と定義されている。その根幹をなすのは、私たちの行動や環境に関わるデータを収集し、仮想空間内で解析・統合、その結果を現実空間の設計や活動の最適化に用いるシステムであり、これにより、高度なコミュニティサービスの提供が可能となり、快適で幸福な生活が実現できるとされている。

しかし、地域住民の反対による挫折例、また個人情報漏洩、メリット享受の不公平性、経済や技術優先への不安などの点から、社会受容、ひいては、スマートシティの倫理的、法制度的、社会的課題(Ethical, Legal and Social Issues: ELSI)が問題となっている。コロナ禍という状況もあり、情報インフラ・倫理・法のあり方が問い直されているなか、学際的議論が求められている。

では、この課題について、人々の態度や、社会関係・制度のなかでの行動を研究対象としてきた社会心理学はどのように貢献しうるのだろうか。本WSでは、スマートシティの現状や社会受容に関する研究知見を共有し、この問いに向き合うための議論を深めたい。

WSでは田井氏が、スマートシティ構想と経済界の動向や国内外のスマートシティの現状を報告する。ついで、橋本氏・清水氏両名より、スマートシティの社会受容に関わる心理的要因(たとえばリスク認知や信頼)の整理、および態度調査に基づく実証的な検討結果を報告する。最後に尾崎氏が、失敗事例として著名なトロントのサイドウオークの分析に基づき、「失敗」の背後にあるダイナミクスを報告する。指定討論では藤井氏に、社会心理学の果たすべき役割・責務や科学技術と人・社会の関係について議論いただく。

生体ストレス反応を測定する実験でのバーチャルリアリティの利用

企画者： 大江 朋子 (帝京大学)

司会者： 大江 朋子 (帝京大学)

話題提供者： 西口 雄基 (東京大学)

實吉 綾子 (帝京大学 非会員)

大江 朋子 (帝京大学)

概要

生体反応や反応時間を記録する実験室実験を行うときには、一般に環境の厳密な統制が必要になる。このような実験をする研究者たちは、画像や単語などの静的な刺激を作成してPC画面上に呈示するなど、刺激を与える環境を絞り込むとともに、その環境に余計なものができるだけ混入しないように注意を払い、実験環境を極限まで統制しようとする。この種の研究アプローチには、特定の刺激に対する反応の細やかな違いを検出することができるという利点があり、この利点が現在に至るまで社会的認知研究を発展させてきた要素だと言える。しかしながら、わたしたちの実際の社会生活は他者との交流を含む動的なものであり、そこには四角い画面の中にある静的な状況では得られない社会的な認知や生体反応が生じ、それが行動を生み出す引き金となることがある。この研究アプローチの制限を超えて実験室実験の生態学的妥当性を高めていくことは、これからの社会的認知研究の重要な課題の一つだと考えられる。

バーチャルリアリティ (VR) は、この課題に挑む手段の一つとなるかもしれない。近年、VRはますます身近になってきた。メディアでもしばしば取り上げられ、体験できる機会も増え、安価な機材を購入して自宅で楽しむこともできる。日本社会心理学会の第6回春の方法論セミナー (2019年3月開催) においても、「社会心理学者のためのVR入門」という企画で、心理学とその関連領域でVRを利用した研究や、VRを実際に研究に導入する手法が紹介され、VRを用いた社会心理学研究の可能性を考える機会が与えられた。その後、日本の社会心理学的な研究で本格的にVRを取り入れたものはあるだろうか。学会で発表された研究、準備中の研究もあるが、研究を実施するまでの道のりにはまだハードルがあるかもしれない。

本ワークショップでは、他者と相互作用する際の生体ストレス反応 (e.g., 唾液中のコルチゾールやアミラーゼ、心拍) を測定した社会心理学的研究を、VRを実際に利用し始めた研究者を交えて紹介する。話題提供者らは、主に面接場面での参加者の生体ストレス反応を測定した実験を紹介する。話題提供者の西口はVRを用いない状況での実験結果を、實吉と大江はVRを用いた状況で同様の実験を行った結果を報告する。最後に、VR空間での他者との相互作用を扱う研究の利点と制約、VRや他のデバイスを利用した今後の社会的認知研究の可能性について議論する。

チームの「心理的安全性(psychological safety)」に関する社会心理学的研究の今と将来

企画者： 山口 裕幸 (九州大学)

司会者： 山口 裕幸 (九州大学)

話題提供者： 池田 浩 (九州大学)

縄田 健悟 (福岡大学)

山口 裕幸 (九州大学)

指定討論者： 繁柁 江里 (青山学院大学)

青島 未佳 (KPMG コンサルティング 非会員)

概要

心理的安全性は、Schein & Bennis (1965)や Kahn (1990)によって、組織の創造的変革やメンバーのワークエンゲージメント促進の文脈で、その重要性が指摘されていたが、Edmondson (1999)が「学習する組織」の構築に不可欠な要素として取り上げたことによって、さらなる注目を集める概念となった。彼女によれば、チームの心理的安全性とは、このチームでは、率直に自分の意見を伝えたときに、他のメンバーによって拒絶されたり、攻撃されたり、恥ずかしいことを言う人だと批難されたりして、対人関係の悪化を招くのではないかと心配をする必要はないという信念が、チーム全体で共有されている状態を意味する。

チームのメンバーたちの相互作用が生み出す集団レベルの創発特性に関する社会心理学研究は、Lewin の「心理学的場」理論の提唱をはじめとして、集団の規範や文化、ソシオメトリー等の対人関係ネットワーク、チームワークや共有メンタルモデル等に注目し、その生成過程と測定およびその影響について検討してきた。「心理的安全性」の研究は、これらの集団創発性に関する研究に新たな視点をもたらすことが期待される。

他方、組織やチームのマネジメントにとって、メンバー同士が闊達にコミュニケーションを交わし、刺激しあって、斬新で創造的な職務遂行の実現の促進を考えるうえで、「心理的安全性」を構築するマネジメント、リーダー行動とはいかなるものかを明らかにする取り組みは、組織経営における切実な実践的課題となっている。

このように理論的にも実践的にも注目を集める「心理的安全性」に関する実証科学的研究は、現在、どのように行われ、いかなることが明らかになり、将来どのように展開されようとしているのか。このワークショップでは、具体的な実証研究の成果報告を行うとともに、今後の研究の展望について議論する。

- 【話題提供】
1. 池田 浩 「組織・チームの『心理的安全性』とリーダーシップ」
 2. 縄田健悟 「『心理的安全性』とチームプロセスの諸変数との関係性」
 3. 山口裕幸 「『心理的安全性』の構築を促進するチーム力開発方略」

- 【指定討論】
1. 繁柁江里 組織を対象とする社会心理学研究の視点から
 2. 青島未佳 組織現場におけるチーム力開発の実践の視点から

組織と人の影響過程—職場適応に関する臨床社会心理学

企画者： 塚原 拓馬 (実践女子大学)
司会者： 塚原 拓馬 (実践女子大学)
話題提供者： 塚原 拓馬 (実践女子大学)
杉山 崇 (神奈川大学 非会員)
北村 英哉 (東洋大学)
指定討論者： 坂本 真土 (日本大学)

概要

職務適性や組織風土とのミスマッチ、ジェンダーギャップなどによる職場不適応は、個人の問題だけでなく、所属する集団・組織に何らかの課題(問題)がある場合がある。こうした集団適応に対するアプローチとしては、社会心理学的知見に基づいた現象の理解と対応法の探索が有効ではないだろうか。それは、職場不適応が、組織とのミスマッチ、職場のコミュニケーション不全、(ジェネレーションやジェンダーギャップによる)上司・同僚とのコミュニケーション困難など、組織的な影響過程(集団力学)により生じているとも考えられるからである。

また、対応においても、例えば、従来型のうつ病に対する対応の仕方を新型うつへ適用することは不適切であり、その特性の違いを概念・理論的に明らかにし、その基礎的知見に基づいた対応法を検討することが有効であろう。また、予防対策や人材育成、職場改善という視点からも、エビデンスに基づいた社内外の研修を活用することが求められている。

そこで、今回のシンポジウムでは、組織と人の影響過程に着目して、社会心理学的知見に基づいた現象の理解や、対応法について議論したい。また、実際の支援や実務場面において成功・失敗事例を基に、その事例から見出せる臨床実践、実務場面における臨床社会心理学的アプローチの可能性について議論したい。

○企画・司会 話題提供者 塚原 拓馬 (実践女子大学)

企画趣旨説明、復職支援成功・失敗事例により組織と人材の影響過程が職場適応に与える影響について、分析結果等も交えて臨床社会心理学的アプローチの可能性について議論する。

○話題提供者 杉山 崇 (神奈川大学)

Bodner & Mikurincer のパラノイア(他者の敵意や悪意に過敏になる状態)の *camouflaged depression* 仮説に注目し、新型うつ病とよばれる状態がコーピングである可能性を検討したい。何に対するコーピングが、どうすれば仕事へのモチベーションを作り出せるか、広く可能性を議論したい。

○話題提供者 北村 英哉 (東洋大学)

ジェンダー・バイアスの観点から職場で生じる適応問題やワーキング・モチベーションの減退に関わる現象をとりあげて論じる。

○指定討論者 坂本 真土 (日本大学)

社会的不平等の原因論—遺伝環境相互作用の立場から

- 企画者： 敷島 千鶴 (帝京大学)
司会者： 敷島 千鶴 (帝京大学)
話題提供者： 山形 伸二 (名古屋大学 非会員)
川本 哲也 (国土舘大学)
敷島 千鶴 (帝京大学)
安藤 寿康 (慶應義塾大学 非会員)

概要

人間の形質の個人差に及ぼす影響を、遺伝と環境という枠組みから検討する方法に行動遺伝学のアプローチがある。この統計学的方法では、形質に観察される類似性を、一卵性双生児対と二卵性双生児対の間など、家系内の異なる家族関係の間で比較することにより、その形質の背後に仮定した遺伝要因と環境要因の寄与の大きさを量的に推定する。

この方法論を用いて、慶應義塾ふたご行動発達研究センター (KoTReC) では、1998 年以来、1970~2011 年生まれの双生児男女 8000 組以上を対象に、人間の広範な形質と、その個人を取り巻く家庭や社会の背景を繰り返し測定してきた。そして、身体的形質のみならず、パーソナリティや感情という心理的形質の個人差にも、さらには、社会的態度や向社会性、教育的・社会的達成という社会的形質の個人差においても、遺伝の影響が寄与していること、しかしそれらの寄与は決して固定的、決定的ではなく、年齢や時代、社会的・文化的背景によって発現の程度を変えていることを明らかにしている。

本ワークショップでは、これまで KoTReC が行ってきた双生児研究から得られた知見を幅広く紹介する。具体的には、話題提供者 1 は成人期の主観的幸福感とパーソナリティの関連性に見られる遺伝と環境の影響を報告する。話題提供者 2 は小中学生の社会情緒的コンピテンスの個人差に寄与する養育行動の影響について、話題提供者 3 は小中学生の学力に及ぼす遺伝と家庭の影響について、それぞれ 2 時点のパネルデータの分析結果をもとに紹介する。また話題提供者 4 は小中学生ならびに高校生の学力に及ぼす遺伝と家庭の影響について、大規模横断調査の結果を報告する。

遺伝と環境が絡み合う複雑な相互作用から、教育格差や階層再生産、地位の世代間継承という社会的不平等をどう説明することができるのか。行動遺伝学が社会心理学に貢献し得る可能性を議論する。

Dark Triad/Tetrad と問題行動を再考する—社会的関係性の視点から

企画者： 喜入 暁 (大阪経済法科大学)

司会者： 喜入 暁 (大阪経済法科大学)

話題提供者： 喜入 暁 (大阪経済法科大学)

増井 啓太 (追手門学院大学)

下司 忠大 (早稲田大学)

指定討論者： 古村 健太郎 (弘前大学)

概要

社会的に望ましくない行動・思考スタイルを示しがちなパーソナリティ群として、Dark Triad, あるいは Dark Tetrad が挙げられる。これは、マキャベリアニズム, ナルシシズム, サイコパシー (およびサディズム) の総称であり、冷淡さ, 他者操作性, 自己中心性などを共通の特徴とし、実証的研究においても Dark Triad/Tetrad がさまざまな問題行動を説明することが明らかにされている。

しかし、これまでの多くの研究では Dark Triad/Tetrad と問題行動との直接的な関連や、個人特性としての個人内過程に関する側面に注意が向きがちであり、問題行動との関連を、社会的な関係性や文脈における相対的な位置づけを踏まえて扱う研究は多くない。問題行動は社会とのかかわりにおいて生じるため、Dark Triad/Tetrad の個人内過程のみに着目するのではなく、社会的関係性にに基づき、また、他の問題行動促進要因への着目を通して、相対的な位置づけを考慮する必要があると考えられる。

そこで、本ワークショップでは、Dark Triad/Tetrad と問題行動について、社会的文脈を踏まえた相対的な視点に基づく研究知見を紹介したい。具体的には、話題提供者1は、Dark Triad とパートナー暴力との関連に及ぼす嫉妬 (jealousy) の影響についての研究知見を紹介する。話題提供者2は、Dark Triad/Tetrad とネット荒らしとの関係性に及ぼす愛着スタイルの影響についての研究結果を報告する。話題提供者3は、攻撃性, 利他性, ソーシャルサポートの観点から、Dark Triad の高い人々に特徴的な対人プロフィールを示した結果を報告する。

社会的関係性の視点から問題行動を捉え、Dark Triad/Tetrad をはじめとするダークなパーソナリティに関する研究知見と統合することで、どのように社会に貢献し得るのかを議論していきたい。